

# アジアの村落開発における伝統的な知識や技術を

## 生かした教育の可能性についての研究

A study on the possibility of education utilizing indigenous knowledge and skills for rural development in Asia

金田 卓也<sup>1</sup>, 石井 雅幸<sup>2</sup>, 矢野 博之<sup>3</sup>, 下田 敦子<sup>4</sup>

Takuya Kaneda<sup>1</sup>, Masayuki Ishii<sup>2</sup>, Hiroshi Yano<sup>3</sup>, and Atsuko Shimoda<sup>4</sup>

<sup>1</sup>大妻女子大学家政学部児童学科, <sup>2</sup>大妻女子大学家政学部児童学科, <sup>3</sup>大妻女子大学家政学部児童学科,  
<sup>4</sup>大妻女子大学人間生活文化研究所

キーワード: アジア, ネパール, 教育, 自然素材

Key words: Asia, Nepal, Education, Natural materials

### 1. 研究目的

本研究の目的は、アジアの発展途上国において持続可能な村落開発を実現するために地域に根ざしている伝統的な知識や技術を教育の中でどのように生かしていくか、その具体的な方法と課題を明らかにすることである。

アジアの発展途上国において、それぞれの国で抱える多様な社会問題を解決する上で教育が重要な役割を担っていることはいままでのことである。これまでも、ユネスコを中心に識字教育の普及には特に力が注がれてきた。一方、情報技術の革新に伴う社会のグローバル化が進む中、国家間及び国の中での格差がより拡大しつつある。それに伴い、発展途上国の国内での教育格差というものも著しくなっている。

発展途上国の中でも、都市部では欧米への留学・移住を前提とした英語教育が盛んに行われ、村落地域の学校との間の大きな教育格差というものが生まれている。そうした状況の中、発展途上国の村落地域における教育の在り方に関する問題意識というものがある。

本研究の研究代表者及び共同研究者は、現地での教育に関わるフィールドワークを継続する中で、それぞれの地域の生活に根ざして生まれ、受け継がれてきた知識や技術というものを教育と結びつけることの重要性を指摘してきた。本研究では現地調査に基づきその具体的な方法を探ることとした。

### 2. 研究実施内容

研究代表者は、共同研究者である石井と矢野と共にネパールのダーディン (Dhading) 郡 ムラバリ (Mulabari) 村における教育の問題に関する現地調査を継続してきた。研究代表者は、専門分野である造形教育の視点から、2018年より、ムラバリ村において、国内外で注目されてきているアート活動を地域の活性化と結び付ける「社会関与型アート」(Socially Engaged Art) のひとつとしてのアートプロジェクトを試みている。2019年6月2日～7日に実施した研究代表者によるネパールでの現地調査はそのアートプロジェクトを発展させたものである。

#### 調査地の概要

ムラバリ村は首都カトマンドゥ盆地から車両でトゥリスリ (Turishuli) 川に沿った幹線道路を進み、途中のアダムガート (Adamghat) の町からは直接車両で入ることはできず、村まで3時間程歩かなければならない。この村は2015年4月25日に発生した大地震の震源に近かったため大きな被害を受け、2019年の段階でも復興は十分に進んでいるわけではない。そのため村の男性の多くは中東などに出稼ぎに行かざるを得ない状況である。

農業と山羊の飼育による自給自足的な生活であり、現金収入の道は極めて限られており、換金作物としてウコンなどが栽培されている。村まで四輪駆動の車両で入ることはできるが、橋のある所までトゥリスリ川に沿って進まなければならず、舗装道路のある町を過ぎてから数時間かかる。電

気は来ているが、長時間の停電も頻繁に起こり、電気は夜の明かり以外ほとんど用いられていない。村人のほとんどはヒンドゥー教徒であり、上位カーストと下位カーストが混在して住んでいる。村内には6年生までの全校生徒約120人のムラバリ小学校がある。

### 研究方法

ネパールにおける現地調査に関して、方法論的にはプロジェクトの実践 (action) を試みることとその実践自体が調査 (research) 対象であるというひとつのアクションリサーチである。そのアクションリサーチを通して、地域の生活に根ざした知識や技術の掘り起こしと、その知見の教育実践への導入を試みる。プロジェクトはムラバリ村から徒歩1時間半程のところにあるカレリ中等学校の教員であるリラ・バハドゥール・ビシュワカルマ (Lila Bahadur Bishwakarma) 氏の協力により進められた。6月の現地調査以外の期間もスマートフォンの Messenger のアプリを利用し、現地とのやりとりをすることによって調査を続けた。

### 竹素材の活用

本研究では地域に根差した伝統的な知識や技術を生かしていく上で自然素材の活用という点に着目することにした。身近な自然素材である竹を活用したアートプロジェクトは地震による被害により新しく設置された貯水タンクを覆う竹組みの小屋作りから始まった。

竹組みの小屋作りの体験を生かして、竹を用いた村の集会所が建設されることになり、子どもたちも一緒に村人総出で作業が進められた。近くの村から竹を伐採しトラクターで建設予定地まで運ばれ、基礎にするために村内にある大きな石が集められた。6月の現地調査の時点では、基礎コンクリート打ちの作業が終了し、伐採した竹を組み合わせて集会所の構造躯体がほぼ完成していた。

教師でもある協力者のビシュワカルマ氏の話では、この集会所を共同体のインフォーマルな教育の場にしたいということであった。子どもたちも基礎の石集めを手伝うなど、集会所の建設に関わっており、この建設作業自体が共同体の絆を深める役目を担っているように思われた。

集会所の建設のために必要な竹がムラバリ村内では手に入らないことが明らかになった。村人の話では、かつては竹が至る所で見られたが、現在はほとんど見かけなくなったということである。以前は背負い籠など竹を用いた生活用品を作るこ

とは当たり前であったが、近年、手作りすることも少なくなり、素材としての竹の重要性が薄れていったという。今回の集会所の建設は、子どもたちも含めた村の若い世代にとって竹素材の利用価値を再認識する機会ともなった。集会所の建設により竹の必要性が理解され、村の小学校の近くに竹を50本ほど植える計画が生まれた。



図1. 竹を集める



図2. 基礎作り



図3. 竹組みの集会所



雨期の8月に近くの村から竹の芽を移植することになり、子どもたちも協力して竹の移植が行われた。研究代表者は教員でもある協力者のビシュワカルマ氏に、子どもたちにこの作業と共に竹の成長を観察するように助言した。

他の植物と比較して竹は成長が早いですが、それでも竹組みに使用できるくらいの長さになるまでは最低でも2、3年はかかる。子どもたちが竹の成長を見守るということは、植物に関する理科的な観察力を養う機会となるだけではなく、時間をかけて成果を待つという忍耐力を養うという教育的な意味もあることをビシュワカルマ氏に伝えた。

なぜなら、ムラバリ村のような貧しい村落地域では、貧し過ぎて将来を見据えて計画的に行動することができない傾向があるからである。たとえば、海外からの援助に関しても、直ぐに使えるものはもらうが、そうではなくて準備等に時間や手間のかかるものは好まれない傾向がある。それは、その日暮らした日雇いの労働者が1日で稼いだ分をその日に食べたり飲んだりしてしまうのと同じことである。計画性がないと批判するのは簡単であるが、貧し過ぎて、保証のない将来の生活まで見通すことができないのである。

忍耐力と共に将来を見通す力を育てるという点において、子どもたちが竹の成長を見守るという活動が教育の中で定着することが望まれる。

竹と竹を繋いだ箇所を縛るためにケトゥキ(ketuki)という山の斜面に自生する植物が用いられるが、最近では工業製品の紐や縄にとって代わられるようになり、若い世代ではケトゥキから紐や縄を作る経験のない者も多い。竹による集会所建設のプロセスは自然素材と伝統的技術について再認識する重要な契機となった。

集会所の屋根を葺くためには枯れ草が手に入る秋まで待たなければならなかった。しかし、屋根がなくとも、この集会所のスペースは大きな絵を描いたり、歌ったり踊ったりできる子どもたちのさまざまな活動の場として利用されるようになった。6月の現地調査のときには竹組みだけであった集会所も秋には茅葺の屋根がつけられた。

#### ICTとしてのスマートフォンの活用

研究調査におけるスマートフォンの活用について詳述しておきたい。なぜなら、日本から遠く離れたヒマラヤの山間部におけるプロジェクトの実践を可能にしたスマートフォンはネパールのような発展途上国の村落地域における教育の質的向



図4. 竹を移植する活動



図5. 竹組みの集会所



図6. 屋根を葺く

上を実現していく上できわめて有効なツールだと考えるからである。

四輪駆動によるアクセスも容易ではないムラバリ村のような村においてもスマートフォンの普及には驚かされる。この村には電話回線は通っておらず、そうした従来の通信のインフラストラクチャーのない発展途上国の村落地域では、村の外と

のコミュニケーション手段として携帯電話は必需品のひとつである。とくに、多くの男性が中東などへ出稼ぎに出ているムラバリ村では海外にいる家族との連絡のために欠かせないものである。

安価なスマートフォン本体が手に入り、日本とは異なるSIMカードにチャージする形の安価な料金体系は貧困層におけるスマートフォンの普及を可能にした。そうであっても貧しい村人たちにとってスマートフォンは高価なものであり、日本のように個人個人が1台ずつ所有しているのではなく、各家庭に1台といった形で共同所有している場合が多い。

ムラバリ村は周囲を山に囲まれ、現在のところWi-Fiを利用することはできないが、Wi-Fiではなく、スマートフォンのデータ通信機能を利用したMessengerのアプリによる現地の協力者とのコミュニケーションは可能である。Messengerではテキストばかりではなく、画像や動画の送受信だけでなく通話もできる。ヒマラヤの山奥であっても、Messengerを通して現地とのやりとりにより、プロジェクトの進行状況を画像や動画と共に即時に知ることができる。Wi-Fiではなく、データ通信によるウェブサイトの検索もできるが、ダウンロードに時間がかかり、現地サイドにおける課金の負担が大きいため、必要な検索は日本側で行い、検索結果をテキストとデータ量を抑えるために解像度を少なくした画像で送ることにした。スマートフォンの活用とは、単に現地との連絡手段として使用するだけではない。スマートフォンを利用して、画像や動画を含めた情報交換をすることによってプロジェクトそのものを発展させるということである。具体的な例でいえば、集会所のデザインをどのようにしたらよいか、タイやミャンマーなど東南アジアの国々での竹建築をウェブサイトで検索し、その画像を現地協力者のスマートフォンに送ることによって、他国の竹素材の利用法についての新しいアイデアを提供することが可能になった。本研究では、スマートフォンの活用により予想していた以上の成果を上げることができた。

### 3. まとめと今後の課題

アクションリサーチとしての本研究では、身近な自然素材である竹を用いて集会所を建てるというプロジェクトを実践することは村人たちが地域

に根ざす伝統的な知識や技術についての理解を深める契機になることを確認することができた。

竹組みの集会所の建設は、単に伝統的な技術を再現したということではなく、スマートフォンの活用に関して述べたように、Messengerのアプリを利用して、研究者である私たちと現地の協力者とのクリエイティブな情報交換により新たなものを創り上げることが可能になり、そのプロセスそのものが子どもたちも巻き込んだ共同体にとっての意義のあるインフォーマルな学びの機会になったといえよう。

今回は学校教育との関連という点では十分に検討することができなかったが、ムラバリ小学校の子どもたちによる竹の移植を竹の成長と共に学校の教育活動の中にどのように位置づけていくかということは今後の課題のひとつである。

また、本研究で試みたように末端デバイスとしてのスマートフォンを活用して情報を共有し、発展させていくことは学校にパソコン1台もない発展途上国の村落地域におけるICT教育を考える上できわめて示唆的である。生活の中で失われつつある伝統的な知識や技術を教育の中でスマートフォンを用いたICTによって蘇らせていくことも今後の課題としたい。

当初は共同研究者の石井によるネパールにおける第2回のフィールドワークを計画し、その成果を元にタイやミャンマーにおける研究との比較検討を予定していたが、新型コロナウイルス蔓延の状況の中、現地調査を中止せざるを得なくなり、その結果を他の共同研究者との報告会で反映させることができず、ムラバリ村での調査を中心とした報告に留まったことを付け加えておく。

\*掲載した写真に写っている人物に関しては、現地の協力者を通して許諾を得ており、個人情報等に関しては、十分な倫理的配慮を行った。

### 4. この助成による発表論文等

①学会発表 金田卓也「持続可能な開発につながる社会関与型のアートプロジェクト」ホリスティック教育/ケア学会第3回研究大会、2019年6月23日、天理大学(奈良県・天理市)

②その他 金田卓也, "Art Project in Nepal", Social Impact is an art, 2019年9月20日, Ecolint Centre des Arts, (スイス・ジュネーヴ)